

## if 節の位置とその意味機能について

廣瀬 浩三

### 0. はじめに

"If A, (then) B." の基本的な意味としては, "if A" によって, 「A の真偽値について話し手・書き手は真であることを知らない [真である可能性が低い, 真ではないと信じている]」ことが表され, if は「話し手・書き手の命題内容に対する『不確かさ』や『疑念』を表す言語記号」と言える。さらに, "(then)B" の部分において, 「A を前提として話し手・書き手が至った結論」が示され, 構文全体としては何らかの因果関係が示されることになる。しかしながら, if 節によって話し手がどのような条件に焦点を当てて主節の主張をしているのかによって, その因果関係には段階性が認められる。<sup>1</sup>

こうした if 節は, 一般的に, 事態を継起的に配列する, あるいは原因の後に結果がくるという自然な情報の流れから, 前置される場合が多い。また, 少し観点を変えると, if 節は, 認知言語学で言う「背景」(background)を形成し, 話し手・書き手の立場からすると「背景」(background)から「前景」(foreground)へと関心が移っていき, 且つ, 聞き手・読み手にとってもその伝達内容の流れが最も負担なく事態を把握できる配列となり, if 節が前置される場合が無標 (unmarked) となっていると言える。しかし実際の言語使用面に少し目を向けると, いわゆる仮定を表す if 節を含め, その現れる位置についての統語上の制限は特になく, 文中や文尾に if 節が現れる例が数多く見出せる。<sup>2</sup> ただし, その場合も, 無作為にその位置が選択されているというのではなく, if 節が担う具体的な意味内容や, 帰結節を含めた全体の意味機能, さらにその談話機能によって, if 節の現れる適切な位置が決定され, その位置的特性を見出すことができる。

本稿においては, 文レベルあるいは談話レベルから if 節の担う意味内容, あるいは談話機能を考察し, if 節と帰結節の相関関係から if 節の現れる位置を探っていきたい。また, 実用的な観点も考慮し, 具体的な事例を挙げると共に, 典型的によく用いられる表現面に注意しながら, 議論を進めていくこととする。

なお, 本稿では, 文頭と文尾にくる if 節を中心に扱い, 文中に現れる if 節については, 「挿入」という談話機能を中心に, それぞれの文脈で独自の意味機能あるいは発話意図があると考えられるが, 詳細には扱わないことを予め

断っておきたい。<sup>3</sup>

## 1. 前置が好まれる if 節の意味機能について

自然な情報の流れから、if 節が前置される傾向にあることをすでに述べたが、前置される if 節についてもう一步議論を進め、以下、文レベルでの意味的特性や談話レベルでの if 節の機能に焦点を当てて、前置される if 節の特徴を考察していきたい。この節では、前置される if 節の中で、いわば有標的な例を議論していくことになる。

### 1.1. (ほぼ) 義務的に前置される if 節

文レベルでほぼ義務的に if 節が前置される例として、まず、Akatsuka(1986)が叙事的反事実文 (indicative counterfactuals) と呼ぶ一連の条件文が挙げられる。

この条件文の特徴は、if 節で表される相手の発話に対して、主節で明らかに事実と反する主張を行うことにより、相手の言葉の真実性を強く否定するところにある。通例、相手の言葉を引き取って、カウンターパンチ的に言い返すような状況で用いられ、先行文脈を必要とすることから、後で扱う談話的要請により if 節が前置する例としても分析できるが、文レベルでの意味的特徴があり、文レベルの if 節が前置される例として、取り上げておきたい。以下が、その典型的な例である。

(1) Pope to a telephone operator in a small Swiss village: I'm the Pope.

Operator: *If you're the Pope, I'm the Empress of China.*

—Akatsuka(1986)

上記の例では、電話交換手の発話は、相手の「私はローマ法王だ」という言葉をそのまま if 節で受け直し、まったく偽である「私は中国の皇太后だ」と切り返して、「冗談はやめ下さい」といったことを伝える文となる。このように、叙事的反事実文においては、if 節で用いられる文と同一の言語学的な先行文脈が明示されることが通例であるが、必ずしも言語学的な先行文脈を必要とせず、(2)のように、状況が先行文脈に取って代わることも可能である。

(2) (Noticing that a friend is trying to lift a huge box) *If you can lift that box, I'm a monkey's uncle.*—*ibid.*

さらに、この種の条件文では、主節で、次のような定型表現もしばしば用いられる。

(3) *If Dave's younger than me, I'll eat my hat.*—Quirk, *et al.*(1985)

次に、Dancygier(1998)が対称メタ言語的條件文 (symmetric metatextual conditional) と呼んでいる次のような条件文でも、語順を入れ替えると不自然となる。この条件文では、if節に周知の内容、あるいは一般によく用いられる言い回しがきて、if節には広く既知情報がきていけると言える。従って、情報の流れとして、既知情報から（話し手・書き手の主張する）新情報へと流れていくという情報構造の観点からも説明できる。

(4) a. *If the Cite is the heart of Paris, the Latin Quarter is its soul.*

b. ??*The Latin Quarter is the soul of Paris, if the Cite is its heart.*

—Dancygier(1998)

また、if節と帰結節に同じ内容がくる同語反復条件文 (tautological conditional) では、if節が後置されると不自然な文となる。

(5) a. *If she's not coming, she's not coming.*

—Celce-Murcia & Larsen-Freeman(1995)

b. ??*She's not coming if she's not coming.*—*ibid.*

さらに、文レベルである程度その位置が予測できる例として、以下のような特殊なメタ言語的條件文として分類できる例が見出せる。

(6)では、if節で”bad”の使い方そのものを問題とし、後置される主節で一歩進めて”worse”が対照的に用いられている。言い換えると、こうした例では、原級の形容詞が”bad”から比較級の”worse”への情報の流れが自然となり、”bad”を含むif節は前置されることが要求され、(6b)のような配列は不自然となる。

(6) a. *If I was a bad carpenter, I was a worse tailor.*

b. ??*I was a worse tailor, if I was a bad carpenter.*—Dancygier(1998)

以上、やや特殊な条件文に焦点をあてることとなったが、一般的な情報の流れに加え、文レベルでそれぞれの if 節の表す意味内容によって if 節の位置が規定され、ある程度予測できることを明らかにした。

## 1.2. 前置が好まれる間接的条件文について

If 節と帰結節が必ずしも論理的な因果関係を表さない場合があり、Quirk, *et.al.*(1985) は、そのような条件文を間接的条件文と呼んでいる。この間接的条件文の中には、その表す意味内容や談話的機能によって、前置が好まれるものがあり、定型的に用いられる表現も多い。以下、その代表的なものをいくつかに分類し、典型的に用いられる表現をまとめておきたい。

まず、以下のように相手に発話の許可を求めるような表現が if 節で表され、この場合、前置されることが多い。実際には相手の許可を得てから発話をしていくことにはならないが、相手に発言の許可を得ることを断ってから自らの発話を進めていくというのが自然な流れとなり、機能的には、このような間接的条件文は「垣根表現」(hedge)として働き、相手に対する丁寧さ、あるいは、話し手の側からすると、予め相手からの批判や反論を避けようとする自己防衛的な意図を持った表現として機能する。この場合、助動詞 may や can を伴う定型的な表現が多く見出せる。

- (7) a. *If you don't mind my saying so, your slip is showing.*—Quirk, *et.al.*(1985)  
b. *If I may be frank with you, I don't approve of any concession to ignorance.*—*ibid.*  
c. *If I may say so without giving you offence, I think your writing is rather immature.*—Quirk & Greenbaum (1990)

類例：*if I may say so (without contradiction), if I may put it bluntly, I may be personal, if I can be serious for just this once, if you keep a secret, if we can be practical for a moment, if I put the matter as simply as possible, if I may interrupt, if I may change the subject, if I could have your attention, etc.*

以下のように、帰結節にくる命令文、疑問文、陳述文に先行し、それぞれの発話が成立する発話条件に言及するような if 節がある。<sup>4</sup> (8a) では、後続

する依頼内容をまだ伝えていないこと，(8b)では，質問の妥当性，さらに(8c)では，相手が聞きたい内容をこれから伝えることを断って，自らの主たる主張が述べられ，(少なくとも表面上は)相手の立場に立った表現となり，“In my opinion, ...”と切り出すよりも，丁寧な表現となる。

- (8) a. *If I haven't already asked you to do so, please sign the guest book before you go.*—Sweetser(1990)  
b. *If it's not rude to ask, what made you decide to leave IBM?*—*ibid.*  
c. *“If you ask me, psychopaths are more(原文イタ) talented than the rest of us.”*—J. Kellerman, *Self-defense*

また，(9)のように，直接命令文を用いて相手に何らかの行動を促すのではなく，ある条件として相手のとるべき行動を示すことによって，間接的に相手に指示を与えるような場合にも，if節は前置されることが多い。

- (9) [tour guide to the people on her bus]

TG: *If you look out the left side, you'll see Mann's Chinese Theater. You'll have a chance to walk back there and take photos in a few minutes.*—Celce-Murcia & Larsen-Freeman(1995)

以下，さらに広い文脈に目を向けて，if節の前置が好まれる場合について議論を進めていこう。

### 1.3. 談話構成上前置が好まれる if 節について

幅広い文脈でif節が前置される典型的なものとしては，先行文脈で話題となっていることをif節で引継ぎ，主節で新たに主張を展開していく場合である。最も分かりやすいのは，(10)のように，直前にきている文を引き継いで，さらに談話が展開されていく場合である。

- (10) There was another low rumble. Elevator doors closing. Then a rough swishing. Like two windbreakers being rubbed together. Micah was moving. The swishing continued. At that pace, he was clearly not in the elevator, O'shea thought. *But if he wasn't in the elevator, that meant ...*—B. Meltzer, *The Book of Fate*

以下の(11)では、直前の文では、if節が後置されているのに対して、2度目に繰り返す場合には、前置されていることに注目されたい。

- (11) She knew the Scholars well: the Librarian, the Sub-Rector, the Enquirer, and the rest; they were men who had been around her all her life, taught her, chastised her, consoled her, given her little presents, chased her away from the fruit trees in the garden; they were all she had for a family. They might even have felt like a family if she knew what a family was, though *if she did*, she'd have been more likely to feel that about the College servants. —P. Pullman, *The Golden Compass*

さらに、必ずしも直前の文を受けるというのではなく、先行文脈で話題となっている内容を前提として談話を敷衍していく場合には、if節は前置が好まれる。次の(12)では、先行文全体を引きついではないが、「彼に会うこと」が関心事となっており、それに関わる内容を述べるif節は、前置が自然な語順となる。

- (12) *I don't need to see him*, he thought. *I'm happy. He'll think I'm crazy.* It was a bad decision. *If I had gone to see him*, I would have learned that day what I did not find out until many years later.—S. Sheldon, *The Other Side of Me*

同様に、(13)では、「ゴルフのスコア」が話題となって談話が展開されており、それに関わるif節は、前置され、さらに談話が進められている。

- (13) “Before I hire a producer, Sheldon,” Harry Gohn told me. “I always ask his golf score.” “Why should that interest you?” “*If he has a low score*, I don't hire him. I want a producer who is only interested producing for me.” —*ibid.*

この他、以下のような、文レベルを越えた話し手・書き手の談話的方策が関与して、if節の前置が要求される場合がある。[cf. Ford & Thompson(1986), Cerce Murcia & Larsen-Freeman(1995)]

(一連の談話の中で、今後の行動のシナリオに対する選択を提案する場合)

(14) [from a phone call discussing the fact that B will be visiting his sister V]

B: I'll probably leave there, at the latest ten...so I'll probably be there at your place, at the latest midnight.

V: Okay, well *if I go to bed*, I'm gonna leave the door open.

B: Oh okay.

V: Okay? 'Cause I usually go to bed early.—Ford & Thompson(1986)

(談話構成上、前述と対照的な内容を導入する場合)

(15) There is another intellectual virtue, which is that of generality or impartiality....When, in elementary algebra, you do problems about A, B, and C going up a mountain, you have no emotional interest in the gentlemen concerned, and you do your best to work out the solution with impersonal correctness. But *if you thought that A was yourself*, B your hatred rival, and C the schoolmaster who set the problem, your calculations would go askew, and you would be sure to find that A was first and C was last.—*ibid.*

(一般的な言明の後に具体例を追加していく場合)

(16) Any solution...acid, base or salt...will act chemically more readily on one electrode than it will on the other. For example, *if electrodes are placed into an orange*, a potential difference will appear between electrodes.—*ibid.*

以上、文レベルを越え、幅広い談話の中で if 節が用いられ、前置される場合について、考察した。この節のまとめとして、前置が好まれる if 節の意味機能について集約しておきたい。

#### 1.4. if 節の前置が好まれる場合のまとめ

Haiman[1987:583]では、if 節は、情報的には話し手・聞き手あるいは書き手・読み手の共有知識を担い、その特性から、if 節の働きとして、後続する談話が選択された「枠」(framework)を形成するものであるとし、(17)のよ

うにまとめている。

- (17) A conditional clause is (perhaps only hypothetically) a part of the knowledge shared by the speaker and his listener. As such, it constitutes the framework which has been selected for the following discourse.

Haiman のこうした一般化は、本稿のはじめに述べた、if 節が談話構成上「背景」(background)を形成することとほぼ重なるが、1.2. のような間接的条件文との関連では、前段の情動的な特徴づけは、話し手志向のものとなり、むしろ、丁寧さの原理を加味して特徴付けておくべきである。if 節が、全体としての命題内容の一部となっている場合と、発話自体の条件付けにとどまっている場合を区別し、その質の違いに注目しておくことが重要であろう。

以上の議論と共に、本稿で議論した前置される if 節の意味機能をまとめると、以下のようになる。

- (18) 前置が好まれる if 節の意味機能：

- ① 先行文脈・状況に依存し、あるいはさらに幅広く一般的な知識を表し、後続する発話の真偽値の判断根拠となる意味内容を表す。
- ② 後続する発話そのものの妥当性を保証する前提条件を示し、相手に対して丁寧なあるいは控え目な発話態度や話し手の自己防衛的発話態度を示す。
- ③ 先行文脈の話題・関心事を引き継いだり、一連の出来事の流れの中で、円滑な談話展開に貢献する談話接続的機能を果たす。

## 2. 後置が好まれる if 節の意味機能について

後置される if 節は、その頻度面からすると全体として有標表現であると言えるが、それぞれの発話場面では、最も相応しい位置として後置が選択され、最大の談話的効果を発揮していると考えられる。前置される if 節に関する議論と同様に、まず文レベルである程度予測可能な場合から出発し、さらに幅広い文脈を考慮し、後置される場合の if 節の意味的特徴を考えていきたい。

### 2.1. (ほぼ) 義務的に後置される if 節

まず、Quirk, *et.al*(1985) が、修辭的な条件節 (rhetorical conditional clause)



と呼んでいるものの中に、if節が通例後置されるような条件文が見出せる。

以下の(19)の例では、if節に自明の内容がきて、主たる主張をした後に、自明な条件を付け加えることで、再度自らの主張の正しさを再確認させる意味機能があり、if節はあくまでも補足機能を果たし、例えば(19a)は、「彼は確かに[少なくとも]90歳だ」といった意味となり、後置される。表現の特徴としては、主節に数値を表す表現がきて、if節では、その最低値が示されることになる。

- (19) a. He's ninety *if he's a day*. —Quirk, *et al.*(1985)  
b. The package weighed ten pounds *if it weighed an ounce*.—*ibid.*  
c. The painting must be worth a thousand *if it's worth a cent*.—*ibid.*

なお、後置される修辭的條件文の一つとして、以下のように、主節に自明に偽である内容がくる定型的な表現もある。(20)では、「絶対に謝るようなことはしない」ということが主張され、if節に話し手・書き手の主張点を示され、文末重点(end-weight)の原則に沿って、後置が自然な位置となる。

- (20) I'll be[I'm]damned[hanged] *if I apologize*. —Quirk, *et al.*(1985)

先に挙げた(6)のような特殊な例はあるが、一般に、メタ言語的條件文は、先行文で用いた言語表現についてのコメントを表すので、通例、後置される。これらのメタ言語的條件文の中には、(21d, e, f, g)のように、定型表現として用いられるものも数多くあり、基本例文と併せて典型的なものを挙げておきたい。

- (21)a. He trapped two mongeese, *if "mongeese" is the right form*.  
—Dancygier(1998)  
b. He trapped two mongeese, *if that's how you make a plural of "mongoose."*—*ibid.*  
c. These were sanitation engineers, *if one wished to be politically correct*.—*Ed McBain, Mischief*  
d. His style is floid, *if that's the right word*.—Quirk, *et al.*(1985)  
e. She is resigning, *if you know what I mean*.—*ibid.*  
f. The Big Ban Theory of the origin of the universe bears a startling

resemblance to the description of creation of Genesis, *if one may put it so.—ibid.*

g. “There were times when I almost thought he wasn’t well, but it wasn’t physical. It was some kind of psychic, *if you’ll excuse the phrase.—S. Grafton, ‘A’ Is For Alibi*

類例 : *if that’s an appropriate expression, if I may put it so, if that’s the correct term, if that’s the word for it, if you see what I mean, if I may phrase it delicately[loosely, crudely, figuratively], if you will, if you like, etc.*

以下のように、言語表現そのものではなく、その指示対象そのものについて言及する場合もメタ言語的条件文と異曲同工の表現と位置付けられ、(22)のように if 節は後置される。

(22) She said, “Well, here’s a name that pops out. Philip Kalish. *He* (原文イタ) was Jewish and Fred knew him in college, *if it’s the same Phil Kalish.*”—L. Block, *A Long Line of Dead Men*

次の (23) では、メタ言語的条件文が、相手との相互作用の中で用いられ、相手の用いた表現そのものについて言及していることに注意されたい。

(23) “How do you know he wasn’t holding something back?” ”I guess I don’t, *if you put it like that.*”—S. Grafton, *‘E’ Is For Evidence*

メタ言語条件文は、以下のようにしばしば省略節で用いられ、文尾に添えられることが多いことも指摘しておきたい。<sup>5</sup>

(24) a. The Queen of England is happy, *if not ecstatic.*—Dancygier(1998)  
b. He spoke ungraciously, *if not rudely.*—*ibid.*  
c. She ate many of the cakes, *if not all.*—*ibid.*  
d. “We announced that she’d died in a boating accident,” he said. “We talked it over, and that seemed like the best way

to handle it. And I suppose it's the truth, *if not the whole truth.*"—L.Block, *Out on the Cutting Edge*

e. "...and it looks as though we were right all along. About the problem, *if not about the solution.*"—L.Block, *Out on the Cutting Edge*

この他、文構成上、主節に評価を表す形容詞がくる場合には、一般的に、if節は後置される。

(25)a. I think it would be better *if you came after all.*—Celce-Murcia & Larsen-Freeman(1995)

b. I would [should] be happy [delighted, sorry] *if he came [he had come yesterday].*—Frank(1993)

また、以下の例のように、名詞句、to不定詞、関係詞節内にif節が組み込まれているような場合には、その修飾関係を明示するために、後置される。<sup>6</sup>

(26) Imagine the difficulty of understanding this information *if it were presented one word at a time.*—Ford & Thompson(1986)

さらに、if節が疑問文や否定文の応答の焦点となっている場合にも、後置が自然な位置となる。<sup>7</sup>

(27)a. Do you fill in this form *if you're a citizen or if you're an alien?*  
—Huddleston & Pullum(eds.)(2002)

b. Here you don't get promoted *if you show initiative* but you put in long hours.—*ibid.*

c. A: Under what circumstances will you leave?

B: I will leave, *if you pay me.*—Comrie(1986)

## 2.2. 後置が好まれる間接的条件文について

間接的条件文のうち、後置が好まれるものがある。以下のように、話者の知識の状態について言及する場合、if節が後置されることが多い。<sup>8</sup>

- (28) a. Chomsky's views cannot be reconciled with Piaget's, *if I understand both correctly*.—Quirk, *et.al.*(1985)  
 b. "It's a poison," she said. "It's an arsenic compound. Arsenic and copper, *if I remember right*, and that accounts for the color." —L.Block, *Out on the Cutting Edge*

同様に、相手の知識の状態について言及する場合にも、後置が好まれる。

- (29) a. The war was started by the other side, *if you remember your history lessons*.—Quirk, *et.al.*(1985)  
 b. Einstein's theory of gravitation is based on a mathematical concept, *if you've not forgotten already*—*ibid.*  
 c. "It's the apartment I grew up in, if you can believe it." —L. Block, *Out on the Cutting Edge*  
 d. "You've got quite a reputation, *if you don't know that already*." —P. Margolin, *The Last Innocent Man*  
 e. "This has to do with the president of the United States." "That's symbolic, *if you want to know my guess. Not literal*."—P. Cornwell, *Unnatural Exposure*  
 f. "Then she took up most of my attention, *if you know what I mean*."—P. Margolin, *The Last Innocent Man*

類例 : *if I'm correct, if I understand you correctly, if I can believe the experts, if you remember, if you know what I'm referring to*

(28), (29) のような場合には、文尾に添えられた if 節により、主節の事実文が、話し手・聞き手の認識や思考の一部となり、必ずしもその真偽性を保証する必要がない文へと転換されてしまうのである。こうしたことを行う発話意図としては、自らの陳述を相手に押し付けないといった丁寧さや控え目な態度、あるいは自己防衛的な態度といったものが関与している。

(30) のように、追加陳述的に、命令文に言葉を和らげる表現が添えられる場合についても、同様の発話意図が窺え、if 節が後置されている。

- (30)a. Let's do the dished later, *if that's okay with you*.—Celce-Murcia &

Larsen-Freen(1995)

- b. “Actually, you might pick up some milk for breakfast. We’re almost out,” she replied. “Get a half gallon of low—fat and a quart of orange juice, *if you would. There’s some money on the kitchen table.*”—S. Grafton, *‘J’ Is For Judgment*

さらに、丁寧さや単なる注意喚起のために疑問文の後に発話条件が添えられる場合にも、if節が後置されることが多い。

- (31)a. Well, why doesn’t he say something, *if he has a solution?*  
—Celce-Murcia & Larsen-Freeman(1995)  
b. Where did your parents go, *if you know?* —Quirk *et al.* (1985)

以上、主として文レベルで、後置が好まれる場合について見てきたが、もう少し幅広い談話的な観点から後置が好まれる場合について見ていきたい。

### 2.3. 談話構成上後置が好まれる if 節

1.3において、if節が談話上の話題を担う場合に前置される傾向にあることを述べたが、文頭位も情報構造的には際立つ位置となり、主節の主語に談話上興味関心のある話題を持ってくる場合には、if節は後置されることになる。

- (32) The Soviet Union government would have been less fierce *if it had met less hostility in its first years.* —Ford & Thompson(1986)

また、主節によって話し手・書き手の主張が展開される場合に、文末重点の原則によりその主節が文尾にくる例はすでに観察したが、逆に、if節が長く、多くの情報量を伴う場合には、if節の方が文末重点の原則に従い、後置されることになる。

- (33) Lana would not receive any apple *if she pressed such incorrect sequences as: please machine apple give or machine please give apple*  
—*ibid.*

ただし、この「長さ」というのは談話依存の相対的なものであり、主節と

の比較で、if節がより長ければ、後置されるというふうに一般化することはできない。むしろ、それぞれの節の持つ談話上の情報価値が問題となる。傾向として、長くなれば、多くの意味上を担い談話上重要となる点は認められるが、以下のように、主節が極端に短くても、後置することが可能である。次の(34)の例においても、結論として「それでおしまい」ということを短い文で文尾に置くことにより、パンチの効いた表現効果を生み出している。

(34) “The problem is he hasn’t been able to come up with a script that the studio will approve. The deal runs out in three months and *if we don’t have script that the studio okays by then, it’s off.*”—S. Sheldon, *The Other Side of Me*

#### 2.4. if節の後置が好まれる場合のまとめ

以上の議論により、後置が好まれるif節についても、文レベルあるいは文レベルを越えたいくつかの意味機能が見出せる。それぞれの文脈で独自の意味機能を担い、その意味機能をすべて集約することは困難であるが、以下のようにその特徴をまとめることができよう。

(35) 後置が好まれるif節の意味機能：

- ① 先行する主節の意味内容の補足・修正を行い、主節の真偽値の妥当性をさらに保証する意味内容を表す。
- ② 先行する発話そのものの妥当性を保証する前提条件を追加陳述的に示し、相手に対して丁寧なあるいは控えめな発話態度や話し手の自己防衛的発話態度を示す。
- ③ 話し手・書き手の談話上の主張点あるいは重点を置く意味内容を示す。

### 3. おわりに

本稿では、if節を取り上げ、その位置と意味機能との関係を論じたが、この問題は、if節のみにとどまらず、その他すべての副詞節に通じるものである。本稿で論じたように、文レベルで、その位置がある程度予測できるものと、幅広く談話機能を吟味することによって、その位置の妥当性を規定できるものがある。今後それぞれの接続詞について、その意味機能と位置との関係を詳細に吟味した研究が必要であろう。そうした個別研究と共に、それらを集約し、広く従属節と主節の位置とその意味機能との関係を明らかにしていく

包括的な研究が今後望まれる。本稿で示した分析の視点が、そうした包括的な研究に役立てば幸いである。

さらに、英語教育面に目を向けると、いわゆるパラグラフライティングあるいはエッセイライティングの重要性が増している中、どのように文、節を配列していくかは、大きな課題であり、本稿で示した談話文法的な視点から、その特徴を纏め上げ、作文指導に役立てていくことができよう。筆者としても、英語学研究成果をいかに英語教育に還元していくかという視点を常に持ちつつ、英語学研究成果をさらに進めていきたい。

#### 注

1. 直接論理的な関係を表さないような条件がif節で表されることもあり、本稿においては、そのような条件文も射程に入れ、間接的条件文、あるいは発話条件文として扱っていく。
2. if節が後置される場合、if節と帰結節の因果関係の観点からは、コンマを伴わない場合とコンマを伴う場合を区別すべき場合がある。例えば、*If it stops raining, I'll take you to the park tomorrow morning.* の場合には、二つの出来事の因果関係が端的に述べられている。他方、if節が後置される場合について、コンマを伴わない *I'll take you to the park tomorrow morning if it stops raining.* では、公園が話題となっている会話、あるいは "Can we go to the park tomorrow?" の応答として用いられ、やはり因果関係が主張されていると言えるが、コンマを伴う *I'll take you to the park tomorrow morning, if it stops raining.* では、if節の機能として、独立的な追加陳述として添えることもでき、その容認性の判断において、特にif節と帰結節の因果間関係は問題とならない。

また、Sweetser(1990)に従うと、コンマを伴う場合のみ、認識条件文 (epistemic conditionals), あるいは発話条件文 (speech act conditionals) として機能することが指摘されている。以下の例では、コンマを伴わない例は、そのような認識的条件文、あるいは発話条件文として解釈されず、いずれも不自然なものとなる：*If she is in the lobby, the plane arrived early. / ??The plane arrived early if she is in the lobby. / ?The plane arrived early, if she is in the lobby./ If I may say so, you're looking particularly lovely tonight./ ?You're looking particularly lovely tonight if I may say so. / You're looking particularly lovely tonight, if I may say so.*

[以上, Dancygier(1998)]

3. 文中のみが容認可能となるような場合もある。以下の例は, if 節がメタ言語的に用いられている例であるが, 情報の流れ上, 文中に現れることがほぼ義務的となり, 文頭にくるとやや不自然となり, 文尾は不可となる: My husband, *if I can still call him that*, hates onion soup./ ?*If I can still call him that*, my husband hates onion soup./ \*My husband hates onion soup, *if I can still call him that*. [以上, Dancygier(1998)] [cf. *If I haven't already asked*, when did you see my husband—*if I can still call him that*.—*ibid.*]

この他, if 節の現れ方として, 次のように, 一文に二つの if 節が用いられる場合や独立的に用いられることもあるが, これらについても本稿では特に詳しく扱わない: *If the proposal is adopted* prisoners will be entitled to a personal TV set *if they enroll for a course at the Open University*.—Huddleston & Pullum(2002)/ He said, “I’ve heard about a foreign film I might be interested in remarking. *If you’re going to Paris*, I’d appreciate it *if you’d take a look at it and tell me what you think*.”—S. Sheldon, *The Other Side of Me* 次は, if 節が独立的に用いられている例: I said, “Join us, why don’t you? My friend’s getting a beer, but the whole row’s empty, or almost. *If you don’t mind sitting in a cheap seat*.”—L. Block, *A Dance at the Slaughterhouse*

4. このような発話条件文の後置も「傾向」にとどまり, 疑問文の場合に, 発話条件文が文尾に添えられることもある: Where did your parents go, *if you know*?—Quirk, *et.al.*(1985)/ “I never see you play it anymore. Have you given it up for some reason—*if I’m not intruding*?” he diffidently added.—E. Segal, *Only Love*

次の定型表現も文頭で用いられることが多いが, 文尾, あるいは文中に現れることもある: “What’s she do, *if you don’t mind my asking*?” “She’s an art historian.”—L. Block, *A Walk Among the Tombstones* / “So how, *if you don’t mind my asking*, do you come into it?”—L. Block, *A Walk Among the Tombstones*

5. ただし, 省略的な if 節すべてが後置されるとは限らない: *If in doubt*, ask for help.—Swan(2005) / I’m not angry. *If anything*, I feel a little surprised.—*ibid.* / *If about to go on a long journey*, try to have a good night’s sleep.—*ibid.*



次は省略節が文中に現れる例：There is little *if any* good evidence for flying saucers.—Swan(2005) / He seldom *if ever* travels abroad.—*ibid.* / His style, *if simple*, is pleasant to read.—*ibid.* / The profits, *if a little lower than last year's*, are still extremely healthy.—*ibid.*

6. ただし、if節がthat節に組み込まれているような場合には、次のように前置及び後置の両方の例が見受けられる：I'm convinced that *if I had been allowed to fly combat*, the war would have been shorter.—S. Sheldon, *The Other Side of Me* [cf. For the first few weeks, they prayed in the hospital chapel. After six months, they visited every day but Sunday, convinced that their Sunday prayers would be more effective *if they came from church*.—B.Metzer, *The Book of Fate*]
7. 次のようにif節が質問の答えとして独立的に用いられるような場合もある：“Kinsey Millhone. May I join you?” ... “*If you like*,” he said.—S. Grafton, ‘*J*’ *Is For Judgment*
8. 認識的な表現が文頭にくる場合もある。このような場合には、文頭にくる表現は発話様式の表現として用いられていると再解釈することもできる：“*If I understand you correctly*, you're saying that I murdered Justice Griffen and framed his wife for his murder.” “That's exactly what I'm saying.”—P. Margolin, *After Dark* / “*If I remember correctly*, I left the phone number. I guess you lost it.”—J. Grisham, *The Runaway Jury* / “*If you want to know the truth*, he was happy just talking about me and finding out what you guys were like.”—E. Segal, *Only Love*

#### 参考文献

- Akatsuka N. 1986. “Conditionals are context-bound,” In E.C. Traugott, A. ter Meulen, J. Snizer Reilly, and C.A. Ferguson(eds.), 333-352.
- Comrie, B. 1986. “Conditionals: A typology.” In E.C. Traugott, A. ter Meulen, J. Snizer Reilly, and C.A. Ferguson(eds.), 143-52.
- Celce-Murcia, M & Diane Larsen Freeman 1999. *The Grammar Book* (2<sup>nd</sup> Edition). Newbury House.
- Dancygier, B. 1998. *Conditionals and Predication*. Cambridge University Press.

- Ford, C. E. & S.A. Thompson 1986. "Conditionals in discourse: a text based study from English." In E.C. Traugott, A. ter Meulen, J. Snizer Reilly, and C.A. Ferguson(eds.), 353-372.
- Frank, Marcella. 1993. *Modern English Grammar—A Practical Reference Guide*. Regents/Prentice Hall.
- Huddleston, R. & G.K. Pullum 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
- Quirk, *et al.* 1985. *The Comprehension Grammar of the English Language*. Longman.
- Swan, M. 2005. *Practical English Usage*. (3<sup>rd</sup> Edition) Oxford University Press.
- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge University Press.
- Traugott, E.C., A. ter Meulen, J. Snizer Reilly, and C.A. Ferguson (eds.) 1986. *On Conditionals*. Cambridge University Press.